

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：12701
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22320100
 研究課題名（和文）小学校英語活動支援のための大学リソース活用モデル構築
 研究課題名（英文）Toward Utilizing University Resources for Elementary School English Education

 研究代表者
 中村 良夫 (NAKAMURA YOSHIO)
 横浜国立大学・大学院国際社会科学研究所・教授
 研究者番号：20237449

研究成果の概要（和文）：2011年に研究分担者（桑本裕二）が小学校英語で用いられる語彙の発音について『小学校英語発音のフシギ』を出版した。2012年には研究代表者と研究分担者および外部の研究者による小学校英語に関する論文集を研究報告書として発刊した。2013年には発音標記に関する論文と、本研究の成果として製作した iPad 用カルタゲームの解説を含む研究報告書を発刊した。また、iPad 用カルタゲーム解説の主要な部分は 2012jeARn 第 2 回全国大会（日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク主催）で紹介した。

研究成果の概要（英文）：In 2011, a member of our project (Yuji KUWAMOTO) published a book on pronunciation of English words for the teachers of elementary school English education. In 2012, we have published an annual report. The book contains 7 articles related to elementary school English education in Japan. In 2013, we have published an annual report. The book contains 2 articles. One is on the IPA (International Phonetic Alphabet). The other shows the iPad software for elementary school English education we have developed in our project. The essential part of it was reported at 2nd national conference of jeARn (Japan Educational Action Research).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2011 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2012 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	7,700,000	2,310,000	10,010,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校英語、外国語活動、発音指導、教材開発

1. 研究開始当初の背景

2008年（平成20年）3月に新しい小学校学習指導要領が告示され、2011年（平成23年）の全面的な実施に向けて2009年（平成21年）4月からは移行期間として外国語活動が実施された。小学校への英語教育導入

に関しては専門家や有識者たちの論議がすでに多く行われ、指導案や教材も数多くあふれる中で、現場の教員をとりまく雰囲気として小学校の現場では、ひとりの「ハイテンション」な「お祭り」授業から、日常的な内容の授業実践が重視されるような

傾向に落ち着きを見せてきた。しかしながら、依然として外国語活動を実施している現場では小学校の先生たちが様々な疑問や問題に直面している。また、「日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気づく」ことを適切に体験しておくことは大学における外国語学習においても必要不可欠な態度の涵養につながり、そして小学校段階での学習こそが有効である面がある。この点で、小学校の英語活動は大学の英語教育関係者にとって看過できない面がある。

小学校英語のカリキュラムや指導案については相当の先行研究が多く、成果を与えてきたものの、先攻研究を手がけてきた研究は必ずしも音声学・音韻論や英語学といった専門分野との連携が十分ではなく、それらの分野の専門家の目を通したものは少ないという状況であり、英語の専門家ではない小学校教員が現場で教える際に現場で即戦力となる支援方法をはじめとするいっそうのサポートの方策が待たれていた。

2. 研究の目的

本研究では、英語教育の専門家と音声学・音韻論や英語学の専門家がチームを形成して専門性を生かしながら実践的な支援のための方策を検討することを目的とした。大学の人的そして物的な資源を活用することで小学校の外国語活動（以下、英語活動と表記する）へのサポートの実行可能性を探り、大学からのサポートであるからこそ効果的かつ効率的に行える事例と方向性を示すことが主眼となる。

なお、本研究では、たとえば大学教員や大学生、大学院生が小学校に出向いて行う活動については扱わない。また、この実践研究は、英語活動を担当する小学校教員の指導力向上の一助となることを目指すものであり、たとえば講師が遠隔教育システムを利用して児童に英会話を指導するといった授業方式も研究の対象外としている。

3. 研究の方法

本研究の主眼は、大学の研究者が小学校で外国語活動を行う現場の教員にとって日常的に役に立つ支援を大学にある物的・人的リソースを活用することで行うことにある。本研究の代表者および研究分担者の構成の特徴として、小学校英語や早期英語教育を第一の専門とはしていない研究者が、各自の専門領域や近接分野の立場から英語教育・英語学・言語学の知見を活かしながら全体的なまとまりを成していくことを目指している。まず初年度から二年目までは各研究者が自分の専門分野の観点から小学校英語に貢献する内容を論文等にまとめ本としてあるいは報告書として発刊し、さらに

最終年度はその成果を踏まえたソフトウェアのプロトタイプを製作した。

4. 研究成果

本研究は平成22年度から開始した3年間のプロジェクトであるが、初年度である平成22年度には、研究分担者桑本裕二が研究成果の一部として『小学校英語 発音のフシギ from いんぐりっしゅ to English』（秋田魁新報社 2011年）を出版した。『小学校英語 発音のフシギ〜』は外国語活動を行う小学校教員向けに英語の音声に関する知識や発音を向上させるための秘訣をまとめた実践的な内容のものである。

平成23年度は研究代表者及び研究分担者、さらに外部から専門家1名が寄稿した論文集を研究報告書として刊行した。第一論文「発音指導に主眼をおいた「英語 LL 演習」の実践」は研究分担者桑本裕二が上述の自著『小学校英語 発音のフシギ〜』を用いて本務校の秋田工業高等専門学校で学生向けに発音指導を行った実践報告である。高専の学生ということで、小学校教員が英語を学んだ最後の時代（多くは大学のいわゆる教養課程）と同等のレベルであり、小学校教員への効果を予測することができるが、意外ともいえる結果も含めて興味深いデータを提示している。第二論文「小学校英語活動に求められる日本人教師に対する英語発音の指導」は、研究分担者桑本裕二が自身の第一論文の結果を踏まえて、小学校教員に対してどのような発音指導が効果的かを考察している。第三論文「小学校英語活動の全面的実施に寄せて」では、研究分担者高橋邦年が、文献や研究発表および実践報告などから小学校教員にとって有益であると思われるものを紹介しながら省察および提言を与えている。第四論文「小学校英語活動への大学からの支援：具体例と考察」では、研究代表者中村良夫が、研究分担者佐野正之と坂田俊策の協力を得ながら実際に公立小学校で行った授業支援の実例について、指導案と大学の留学生や教員が協力した素材データ等について紹介している。第五論文「日本人初級者のための片仮名による英語発音表記」では、研究代表者渡辺雅仁が、英語の音声について予備知識を持たない学習者が無理なく接近できる発音表記を目指し広範な調査と考察を行っている。第六論文「Language Awareness: Applying the Lessons from Diddenheim,」では、研究分担者 Alexander McAulay が、日本ではまだ取り上げられる局面の少ない「言語意識 (language awareness)」について、日本どのように考えるべきか等について考察している。第七論文では外部の専門家として、

満尾貞行先生（横浜国立大学）に「英語教育と小・中連携-学習者の関心・意欲を探る研究 Part 1」を寄稿していただいた。

最終年度の平成 24 年度は、教材プロトタイプ¹の作製と、研究報告書としての論文集の発刊を行った。報告書の第一論文として、前年度の論文集の流れを受けて研究分担者桑本裕二が「英語初学者に対する効果的な発音表記に関する一考察—IPA 表記かカタカナ表記か*—」を寄稿し、昨年度報告書に掲載された自身の論考や研究分担者渡辺雅仁の論文からさらに考察を進めて、初学者への教授という状況でのカタカナ表記の有効性（と同時に問題点）を現実的な視点から論じた。

この報告書の後半は、今年度の成果として製作した、iPad を利用したカルタゲームについて紹介をしている。これは小学校の現場で実際に利用する教材のプロトタイプとして制作したもので、これまでの本研究グループで行ってきた研究や授業支援を振り返ったとき、よりダイレクトに、そのまま教室の中で使えるモノを作ることが可能ではないかとの見通しを持つに至り、研究メンバーの中村、高橋、McAulay、そして桑本が特にこの具体的な教材作りに注力した。実際に iPad 上で作動するゲーム教材を、本研究チームが科学研究費を受ける前に研究協力をしていただいた東京都内の公立小学校の先生がたに検証していただいてフィードバックをいただき、さらに研究分担者佐野正之先生が代表である日本教育アクション・リサーチ・ネットワーク主催の 2012jeARn 第 2 回全国大会の全体交流会においてデモンストレーションを行った。

この教材プロトタイプは、単にゲームを行うだけではなく、ソフトウェアの中に組み込まれた教員・指導者向けの解説があり、その中で研究グループのメンバーの得意分野を生かしたコンテンツを提示することができた。

その解説は発音指導など昨年度および今年度の本研究の成果報告にある諸論文の考察を前提とし、また、本稿執筆者である本研究グループのメンバーが自分の専門領域を生かしながら議論をして作り上げたものであり、本アプリケーションが単なるゲームではなく、小学校の現場で指導実践を行っていくうえで教員や指導者にとって有効となる知見を豊富に与えているものとなっており、本アプリケーションの最大の特徴である。

本研究の主眼は大学の研究者が小学校の英語活動を支援することであり、具体的には、（誤解をおそれずに言えば）英語活動を現場で担当する小学校教員の負担を軽減す

ることにある。忙しすぎる小学校教員のかたがたにとって、本来専門ではない英語を扱うことは大きな負担であることが多く、その負担を軽減するための方策のひとつとしての iPad を利用した英語カルタアプリである。

この研究では、その「負担の軽減」として次の二種類の面を考えている。

(1) 実際の授業で使える教材となりうるものであること

(2) 小学校の先生がたが英語活動のための知識を得られるものであること

(1) については、特に歌やゲームで英語活動をまかなうことが困難な小学校高学年の児童が楽しめるもの（効果が期待できるものであることは言うまでもない）であることを第一として念頭におく必要があると考えた。また、教員が準備に忙殺されるものであってはならないことも当然である。(2) については、小学校の外国語活動は「音声を中心に慣れ親しませる活動」とされるものの、英語の音声を扱うということは英語を専門とする教員や研究者にとってもたやすいことではなく、また音声学や音韻論などを含めた英語学や言語学の専門家の手による小学校英語活動を対象とした解説書などが無いこと（一般向けあるいは英語を専門とする大学（院）生向けのものにも良書はなかなか少なく、あったとしても忙しすぎる小学校の先生がたがそれらを独学で学ぶということは現実的ではない）を問題点として念頭に置いている。

なぜカルタのアプリケーションが有効であると考えられるのかという点についても述べておく。本カルタ・アプリケーションは、通常のカルタ（アプリ）のように、たとえばカルタにリンゴの絵とともに「リ」（あるいは“A”）と文字があり、「リンゴ」（あるいは“Apple”）と音声の流れたらカルタをとるといった幼児向けに提供されているようなカルタゲームを想定しているのではない。上で述べたように小学校高学年を念頭に置いており、高学年の児童が楽しめる絵柄を工夫すること、また音声を中心とする小学校英語活動向けであるのでアルファベットの文字は入れないこととしている。カルタ自体には日本語で「これなあに？」「えんぴつです」と日本語を入れている。これは“*What's this?*” “*It's a pencil.*” という対話例を『*Hi, friends 1*』からピックアップして作ったものであるが、この例文はしばしば無味乾燥あるいは非現実的との批判を受け、小学校英語の現場ではたとえば非常に変わった形をした鉛筆の一部を写真で見せるといった工夫がしばしば行われている。一方で、カルタの絵柄を工夫すれば、高学年の児童が楽しめるもの

にでき、記憶への手がかりにもなるよう配慮した教材とすることができる。本アプリケーションでは、犬を主人公とすることで面白みのある会話を提示することを可能にしている。このような絵は、慣れてくれば小学生自身が楽しい状況設定をして自分でカルタの絵を描いてみるということも将来的には考えられよう。また、このような形式であれば、「リンゴ／Apple」といった名詞など単純なものばかりでなく、相当複雑なものまでも扱うことができる。“Where is the station?” “Go straight, and turn left.” という難しい内容であるが、カルタの絵柄を工夫することで楽しみながら負担無く状況を把握・理解すること、かつ、これらの表現を習得するための記憶の手がかりを提示することができるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①桑本裕二、発音指導に主眼をおいた「英語 LL 演習」の実践、秋田工業高等専門学校紀要、査読無、第 47 号、2012、pp. 99-105

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 1 件)

①桑本裕二、秋田魁新報社、小学校英語発音のフシギ from イングリッシュ to English、2011、138

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

①中村良夫、(製本刊行論文集)『小学校英語活動支援のための大学リソース活用モデル構築 平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号 22320100 平成 23 年度分研究成果報告書』、2012、102

②中村良夫、(製本刊行論文集)『小学校英語活動支援のための大学リソース活用モデル構築 平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号 22320100 平成 24 年度分研究成果報告書』、2013、88

③中村良夫、iPad 用カルタゲームの意義と有用性について発表およびソフトバンクのデモ、2012 jeARn 第 2 回全国大会 (平成 24 年 10 月 7 日、神奈川大学横浜キャンパス)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中村 良夫 (NAKAMURA YOSHIO)

横浜国立大学・大学院国際社会科学部・教授

研究者番号：20237449

(2)研究分担者

高橋 邦年 (TAKAHASHI KUNITOSHI)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00154815

アレクサンダー マッコレー (ALEXANDER MCAULAY)

横浜国立大学・経済学部・教授

研究者番号：10452046

佐野 正之 (SANO MASAYUKI)

横浜国立大学・教育人間科学部・名誉教授

研究者番号：20042765

桑本 裕二 (KUWAMOTO YUJI)

秋田工業高等専門学校・准教授

研究者番号：40333273

渡辺 雅仁 (WATANABE MASAHITO)

横浜国立大学・大学教育総合センター・教授

研究者番号：80210946

坂田 俊策 (SAKATA SHUNSAKU)

横浜国立大学・大学教育総合センター・名誉教授

研究者番号：60018017

(3)連携研究者

()

研究者番号：